

ついに『歴史認識問題研究』創刊号を皆様にお届け出来る日を迎えた。本号は「歴史認識問題とは何か」「中国との歴史戦」の2つの特集を組み、拙稿を含む6篇の論文・研究ノートとシンポジウム記録を掲載できた。どの論文も力作ばかりだ。北村稔論文は読み進む打ちに冷や汗が出てきた。外国の文献を翻訳するとき、勝手に原文に全くない内容を挿入してしまう捏造の常態化を、同論文は中国人の伝統的思考法との関連で鋭くえぐる。島田洋一論文は現在の中国はファシズム体制とみるべきだと、具体的論拠を挙げて精緻に議論する。中国共産党による「反日プロパガンダ」を批判する伊藤哲夫氏の研究ノートは、氏が主宰する『明日への選択』誌で既に発表されたものだが、北村・島田論文と併せ読むことで多くのことを学べると思い、編集部がお願いして本誌に収録した。

韓国のことわざに「はじめが半分だ」というものがある。第一歩を踏み出すまでの準備や覚悟をすることが、物事を成し遂げるための半分の要素を占めるという意味だ。実は、私は20年以上前から、このような雑誌を出す必要を切実に感じていた。誰かがやってくれないかという気持ちがあったが、やはり、必要を感じている人間が口火を切るしかなかった。

なぜ20年以上前、私がそのような必要を感じたのか。それは平成9年、慰安婦問題を巡る深夜テレビ討論に出演したときだった。論敵として向こう側に座っている面々の中に、「日本の戦争責任資料センター事務局長」という肩書きを持つ人物が座っていた。同センターはなんと平成5年から活動を開始し、当初は年4冊の機関誌を出していた。最近では年2冊となったが、いまでも活動を続けている。

本誌に掲載された勝岡寛次氏の力作論文には、付表①として「中国人慰安婦・戦時性

暴力に関する日本語文献一覧」がついている。そこには113点の文献が挙げられているが、なんとそのうち32点が同センター機関誌に掲載された論文だ。執拗に、日本を貶める研究を続けている日本人らがいる。それに比べて、私たち日本の名誉を守る研究をしてきた研究者は、目の前に次々に起きる問題と取り組むのが精一杯で、組織的な研究体制を作ることができなかった。私は平成2年から平成14年まで、韓国・北朝鮮問題専門誌『現代코리아』の編集長として韓国・朝鮮問題で反日勢力に反論してきた。しかし、同誌も既がない。

そのような問題意識から、私は志を同じくする研究者らと2つの共同研究を行い、研究報告を世に問うた。すなわち、『朝日新聞「慰安婦報道」に対する独立検証委員会報告』と『中国人慰安婦問題に関する基礎研究』だ。その参加者らと論議を重ねて、歴史認識問題研究会を作った。モラロジー研究所の廣池幹堂理事長には多大なご支援を頂き、同研究会機関誌の本誌も同研究所内にできた歴史研究室(室長西岡力)が発行所となった。本研究会は今井光郎文化道徳歴史教育研修会から研究助成を頂いている。それ以外にも多くの皆様のご支援を頂き研究会活動を続けている。ここに感謝の言葉を述べて、創刊号の編集後記としたい。(西岡)

歴史認識問題研究

(年2回発行)

創刊号 (平成29年秋冬号)

発行日：2017年9月20日

発行人：西岡 力

編集人：勝岡 寛次

編集部：歴史認識問題研究会

発行所：〒277-0065 柏市光ヶ丘2丁目1番1号

公益財団法人モラロジー研究所

歴史研究室

T e l : 04-7173-3197

F a x : 04-7173-3199

印刷所：株式会社 長正社